Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Developmental Sciences) 2005, Vol. 52, 153 − 163.

看護学生の「人生のイメージ画」

── 死生観を探る媒介として ──

森 田 美弥子　　大 西 呂 尚[1)]

問題と目的

死というのは，その訪れる時期に差があるにしろ必ず全ての人に訪れる事象であり，人は人生を通して常に死や死ぬことのテーマと関わり続けている（丹下，1995)。しかし，現代日本における多くの人はこうした事実を頭では理解していながら，身内の死でも体験しない限りは，明日はわが身との思いで死という事象を理解することは少なく，むしろ死や老化はずっと先のことであるかのように思っているという指摘がある（平山，1991)。こうした基本的認識の背景には，これまでは致命的であった病気や怪我が医療技術の進歩によって治療可能になってきたため，簡単には死なないという認識を持ちやすくなったことや，自宅での死が少なくなり病院での死が増えてきているという社会の変化などが関係している。

終末期医療と死生観　医師や看護師をはじめとする医療従事者は，このような状況のなかで，生や死をどのように受け止め，医療や看護を実践していくかという課題に取り組んでいる。特に看護師は，患者の身の回りの世話をすることも多いため，終末期医療における患者との関係の中で複雑な思いを抱くことも少なくない。

終末期にある患者にどのようなケアを行えばよいのかということは，看護師にとって大きな課題である。デーケン（1987）は，「ベテランといわれるナースであっても，終末期医療において感じる絶望的な無力感と，死を直視しきれない恐怖感は意外に根深いのではないだろうか」と述べ，「終末期医療を担当する看護師が持つ，こうした恐怖や不安をしっかりと見据える」ことの必要性を主張している。生や死に関する観念は一般には死生観と呼ばれ，その形成には人間観，人生観，宗教観など様々な個人の価値観が関わっている。看護師の持つ死生観は看護行為に影響を与えるという指摘（平山，1991）や，病いや健康，生や死をめぐる人間の行動，ケアの行動や目標はその集団が持つ価値観や信念等によって様々であり，それらが密接に関連するとの指摘（Leininger, M. M., 1992）があり，看護師が死生観を培うことは重要だと考えられる。

看護学生と死生観　看護教育において死をどう取り上げるかということは意味のある検討課題となる。山本（1992）は，死の主観化（自己の死として死を引き受けること）を考えた場合，20歳半ばにおいて職場に出たとたんに他者の死に直面しなければならない看護師にとって，自己の死の主観化が未完成のうちに他者の死に直面を強いられることになり，本人はそれをどう受け止めてよいか分からず，混乱に陥ったり燃え尽き状態になったりすることが少なくないとし，看護学生に対する死生学教育の必要性について述べている。谷（1991）も同様に，医療現場での複雑な問題に対処するために，その年齢に応じた死生観を培っておくことの重要さを述べている。

先行研究では，実習や授業に焦点を当てその前後で死や患者に対する思いがどのように異なるか検討したものがいくつか見られる。新見（2002）は，看護学生が持つ人生の意味・目的意識と死や病気・苦悩観について明らかにし，教育の中での関わりを検討している。菊池（2000）は，看護学生が死をどう意味づけどのように体験しているかを調査している。竹下ら（2001）は，臨地実習を通じて死を考える機会がどのように変化したのか，実習前後を比較検討した。茶園ら（2003）は，終末期看護実習における学生の死生観，終末期患者や終末期看護に対する考え方の変化を明らかにすることを研究の狙いとし，実習後では，患者を死にゆく人とする見方からまだ生きている人とする見方へと変化したとの報告がなされている。大山ら（2003）は，看護職と看護学生の死生観の傾向および違いについて分析した結果，「学生も看護職もともに死の不安・恐怖は高かった。学生と看護職の間に有意差がみられなかったことから，看護教育においては不安・恐怖を低減するアプローチよりも死からの回避をしないというアプローチが必要になってくるだろう」としている。

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（前期課程）

このように，看護学生たちは臨地実習で死に関して多くのことを学んでいると思われる。では，実習以前すなわち看護師を志したばかりの段階では，同年代の青年たちとの間で死生観の相違はあるのだろうか。看護学生の持つ死生観の特徴をとらえることができれば，彼らがその後どのように死生観を培っていくのか，またそのためにどのような教育が必要なのかを，さらに明確にしていくことができるだろう。本研究ではこのような視点に立ち，看護師を目指す学生にとって将来現場で終末期医療に携わる際に重要となる死生観に注目した。

死生観への接近方法　これまでは，質問紙を用いて死生観を構成する因子を明らかにしようとした研究が多い（丹下 1995，平井 1999，Templer, D. I. 1970，Colletto, & Lester, P. 1969，Hoelter, J. W. 1979，金児 1994，Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. 1987，河合・下仲・中里 1996）。これらの研究成果を看護教育に関連付けていく場合，河津（1982）によれば，次のような特徴を挙げることができる。死生観の一般的な傾向を知る，概念レベルでの死生観を捉える，知的理解に傾きがち，あるべき姿となりやすい，などである。したがって，看護学生一人一人のものの見方，考え方として内面に編みこまれている死生観を把握しようとするためには，異なったアプローチが要求されると考えられる。例えば，本人によって紡ぎ出される言葉を用いる，イメージレベルでの死生観を捉える，知的側面だけでなく情意的側面にもアプローチする，外からの教育としてインプットするのではなく，本人自身の中から出てきた死生観を感じとり，自分から変化を生じさせる，といったことを重視することになる。このような立場に立つ方法として，河津ら（1982，2004）は，死生観そのものに対するアプローチではないが，連想詩画という方法を用いて，看護師像や看護に対する自らのイメージについて理解を深めるための授業や研修を試みている。その結果，内在していた思いの顕在化，新たな気づき・再認識，学びの共有，今後の課題の発見等々，受講生たちがより深い学びの様相を呈していたことが把握できたとしている。河津らの方法は，看護という言葉から連想される他の言葉を挙げてゆき，それを詩のようにまとめた上で絵を描くというものである。イメージが活性化されやすく，質問紙に回答する方法とは異なる視点での結果が得られると思われるが，実施に際して数時間を要すると報告されている。

イメージレベルでの死生観をとらえる別の方法として，「人生のイメージ画」（やまだ 2000，Yamada 2002）という手法がある。やまだ（1988）は，イメージ画の効用として次の5点を挙げている。①イメージ画は知的な説明よりも，素朴だが根の深い感性に基づいて表現されるので，より本音が表れやすい。②表現する際に意図的に防衛をしたりすることが難しく，言語のように社会的望ましさや価値観と直接結びついていることが少ない。③絵による表現は文字や記号や数によるものに比べて情報処理と情報伝達の方法として優れており，瞬間的に全体を把握できる長所がある。④日本人に適した表現形式である。⑤異なる文化間で比較をするのに力を発揮する。これらの効用のうち，最初の1点目から3点目に関しては本研究の目的に叶ったものであると判断し，今回は人生のイメージ画を用いて死生観をとらえることにする。

本研究の目的　看護学生の持っている死生観にはどのような特徴があるか，看護学を専攻しない同年代の学生と比べてどのような差異があるのかを，「人生のイメージ画」を用いて把握する。それによって，看護学生が学生の間に死生観を培っていく過程を考える上での手がかりを得る。仮説として，看護学生は看護を学んでいない大学生に比べて，相対的に多くの割合で描画の中に「死」を何らかの形で描くのではないかと予想しているが，今回は初めての試みであり，探索的に特徴をとらえていきたい。

方　法

対象　A県内にあるX高校看護科（5年課程）4年生37名（男性1名・女性36名，年齢：18歳～19歳，記入のあった36名の平均年齢18.3歳），B県内のY看護専門学校1年生35名（男性3名・女性32名），B県内のZ大学1～2年生111名，うち理系学部39名（男性33名・女性6名），文系学部72名（男性14名・女性53名・不明5名，年齢：18歳～51歳，記入のあった66名の平均年齢20.1歳）。このうちX高校看護科の学生は，これまで2週間の看護実習に出ているが，看取りの経験などはない。

実施方法と実施期間　実施は2005年6月下旬から8月の上旬までの期間に，各学校の講義室において授業時間の一部を利用して集団にて実施した。所要時間は約15分～20分であった。

「人生のイメージ画」（やまだ 2000，Yamada 2002）を，以下の手続きで施行した。

A4の紙を1人1枚配布し，「人の一生，生まれてから死ぬまでを絵に描いてください。人間一般でも自分の人生でもよいです。紙はどのように使っても構いません」という教示を行った。途中，質問があった場合には，自由に描きたいように描いてよい旨を返答した。描画後，「何を描いたか，何故それを描いたか，など，紙の裏に説明を書いてください」と伝えた。X高校看護科およ

びZ大学文系学部では，性別・年齢も記載するように求めた。Y看護学校およびZ大学理系学部においては，対象者が特定されることを避けるため性別それらの記載は求めなかった。

分析方法　「人生のイメージ画」には分析の視点について明確な基準があるわけではない。今回は，やまだ（2001，2002b）と加藤（2002）の先行研究，ならびに2004年にB県内の大学で行った予備調査を基に，以下の3側面から分類基準を設けた。

A：死が描かれているか

B：人生がプロセスとして描かれているか

C：何によって人生を表現しているか

各側面の分類基準の詳細は，末尾に添付する。これにもとづき分類を実施し，看護学生72名と大学生111名の比較を行った。

さらに，看護学生による人生のイメージ画について，特にプロセスに注目して代表例を抽出した。検討に当たっては，やまだ（1995，2002a）による生涯発達のモデルを参考に用いた。

結　果

(1)　分類の一致率

末尾に添付した分類基準により，183名の人生イメージ画を分類した。データ分類の妥当性を確認するために，心理学を専攻している大学院生3名の協力を得た。コーエン（Cohen，1960）のκ係数を参考にして分類の一致率を計算した。ただし，今回は各分類基準におけるカテゴリが5から8個であり，偶然の一致率の寄与は無視できるとみなして一致率の計算を行ったところ，表1のような結果が得られた。

表1　各学校における分類基準ごとの一致率

	一致率（%）		
	分類A	分類B	分類C
X看護	84.2	94.7	89.5
Y看護	94.3	85.7	77.7
Z大文系	94.4	88.9	91.7
Z大文系	100.0	85.0	90.0

(2)　分類基準ごとの出現頻度

分類基準A（死を描くか）について，結果を表2に示す。何らかの形で死を描いている者（A2～A4の合計）が，X看護75.7%，Y看護54.3%，Z大（文系）75.0%，Z大（理系）53.8%を占めた。さらに，その中で，象徴的表現での死を描く者（A4）がどの群でも最も多かった。

分類基準B（生まれてから死ぬまでのプロセスを描くか）の結果を表3に示す。プロセスを描いている者が，X看護81.1%，Y看護94.3%，Z大（文系）86.1%，Z大（理系）92.3%を占めた。そのうち，いずれの群でも多いのは，平坦型（B6）であった。それ以外のカテゴリーについては，下降するプロセス（B4）を描いたのがX看護の生徒1名のみであったことから，B4の出現頻度は全般的に低いと考えられる。

分類基準C（何を描いたか）の結果を，表4に示す。人間を描いている者が最も多く，X看護40.5%，Y看護82.8%，Z大（文系）61.1%，Z大（理系）84.6%となっていたが，描かれた人が自分であるか（C1）人間一般

表2　分類基準A（死が描かれるか）の回答者の人数と割合（　）内は%

学校名	分類A（死を描くか）					
	描かない（A1）	独りの死（A2）	周囲の人（A3）	象徴的（A4）	分類困難（A5）	合計
X看護	8(21.6)	5(13.5)	0(0.0)	23(62.2)	1(2.7)	37(100.0)
Y看護	16(45.7)	2(5.7)	3(8.6)	14(40.0)	0(0.0)	35(100.0)
Z大文系	16(22.2)	15(20.8)	2(2.8)	37(51.4)	2(2.8)	39(100.0)
Z大理系	18(46.2)	3(7.7)	1(2.6)	17(43.6)	0(0.0)	72(100.0)

表3　分類基準B（プロセスが描かれるか）の回答者の人数と割合（　）内は%

学校名	分類B（プロセスが描かれるか）								
	プロセスでない（B1）	円環（B2）	上昇（B3）	下降（B4）	ピーク（B5）	平坦（B6）	分岐（B7）	分類困難（B8）	合計
X看護	2(5.4)	5(13.5)	1(2.7)	1(2.7)	2(5.4)	21(56.8)	0(0.0)	5(13.5)	37(100.0)
Y看護	0(0.0)	1(2.9)	1(2.9)	0(0.0)	1(2.9)	28(80.0)	2(5.7)	2(5.7)	35(100.0)
Z大文系	4(5.6)	2(2.8)	3(4.2)	0(0.0)	1(1.4)	55(76.4)	1(1.4)	6(8.3)	39(100.0)
Z大理系	2(5.1)	0(0.0)	2(5.1)	0(0.0)	1(2.6)	32(82.1)	1(2.6)	1(2.6)	72(100.0)

表4　分類基準C（何が描かれるか）の回答者の人数と割合（　）内は%

学校名	分類B（プロセスが描かれるか）								
	プロセスでない（B1）	円環（B2）	上昇（B3）	下降（B4）	ピーク（B5）	平坦（B6）	分岐（B7）	分類困難（B8）	合計
X看護	8(21.6)	7(18.9)	0(0.0)	14(37.8)	3(8.1)	2(5.4)	2(5.4)	1(2.7)	37(100.0)
Y看護	6(17.1)	23(65.7)	0(0.0)	2(5.7)	0(0.0)	1(2.9)	3(8.6)	0(0.0)	35(100.0)
Z大文系	8(11.1)	35(48.6)	1(1.4)	16(22.2)	3(4.2)	2(2.8)	6(8.3)	1(1.4)	39(100.0)
Z大理系	3(7.7)	27(69.2)	0(0.0)	3(7.7)	2(5.1)	0(0.0)	4(10.3)	0(0.0)	72(100.0)

か（C2）の出現の仕方には，群による違いが見られた。また，人間以外の内容についても，X看護とZ大（文系）では他の生き物（C4）が多いのに対し，Y看護とZ大（理系）では幾何学模様（C7）が多いなど，分類基準Cについては群により異なった特徴が示された。

(3) 看護学生と大学生の比較

X看護およびY看護を合わせて看護学生群，Z大（文系）およびZ大（理系）を合わせて大学生群とし，両群の比較を行った。分類基準ごとの出現頻度の内訳を見ると，特定カテゴリーに集中する傾向があり，細分化したカテゴリーをすべて用いて比較することは困難であると判断し，複数のカテゴリーをまとめて，以下の点についてのみ分析を行った。

死が描かれているか（分類基準A）　「死を描かない」（A1）と「死を描く」（A2～A4）の割合に注目し，χ^2乗検定を行った。結果を表5に示す。看護学生と大学生との間で出現比率に差はなく（$\chi^2(1)=0.134$ (n.s.)），看護学生は何らかの形で死を描くことが一般大学生よりも多いという仮説は支持されなかった。学校別に見ると，X看護とZ大（文系），Y看護とZ大（理系）がそれぞれ類似した描画特徴をもっていた。

表5　死を描くか否か（専攻分野別内訳）

		死を描くか		合計
		死を描く	死を描かない	
専攻	看護系	47	24	71
	Z大学	75	34	109
合計		122	58	180

$\chi^2=.134$, df＝1, n.s.

人生がプロセスとして描かれているか（分類基準B）

看護学生と大学生いずれにおいてもプロセスを描いたものの割合は高く，特に平坦型プロセスが多かった。次に，プロセスを描いたものの中で，最も多かった平坦型（B6）と，それ以外（B2～B5，とB7）との比較を行ったを合わせて1つのカテゴリとした。χ^2乗検定を行ったところ，表6－1，表6－2に示すように傾向差が見られ（$\chi^2(1)=3.536$ ($p<0.1$)），看護学生は大学生と比べると，平坦型以外のプロセスを多く描く傾向にあることが示唆された。

表6－1　プロセスを描くか否か（専攻分野別内訳）

		プロセスを描くか		合計
		平坦型プロセス（B6）	他のプロセス（B2～B5，B7）	
専攻	看護系	49	14	63
	Z大学	87	11	98
合計		136	25	161

$\chi^2=3.536$, df＝1, $p<0.1$

表6－2　残差分析の結果（標準化された残差）

		残差分析の結果	
専攻	看護系	−1.880*	+1.880*
	Z大学	+1.880*	−1.880*

*$p<0.1$

何によって人生を表現しているか（分類基準C）

「人間」（C1～C3）と人間以外のもの（C4～C7）を比較した。χ^2乗検定を行ったところ，差は見られなかった（$\chi^2(1)=0.094$ (n.s.)）。そこで，人間を描いた学生のみ（C1，C2，C3のいずれか）を対象として，描かれた人間が，自分自身なのか（C1）人間一般なのか（C2およびC3）について分析を行った。フィッシャーの直接法による検定（森・吉田，2003）を行ったところ，有意確率0.062であった。従って，看護学生と

表7　人間を描くか否か（専攻分野別内訳）

		人間を描くか		合計
		人間を描く（C1～C3）	人間を描かない（C4～C7）	
専攻	看護系	44	27	71
	Z大学	70	39	109
合計		114	66	180

$\chi^2=.094$, df＝1, n.s.

大学生とで傾向差が見られ，看護学生の方が自分自身の人生を思い描く傾向があることが示された。結果は表7，表8－1，表8－2に示す。

表8－1　自分を描くか人間一般を描くか（専攻分野別内訳）

	本人を描くか		合　計
	本人を描く（C1）	人間一般を描く	
専攻　看護系	14	30	44
Z大学	11	59	70
合　計	25	89	114

$\chi^2 = 4.092$，df＝1，$p < 0.1$

表8－2　残差分析の結果（標準化された残差）

		残差分析の結果	
専　攻	看護系	2.022*	−2.022*
	Z大学	−2.022*	2.022*

*$p < 0.1$

(4)　描画例

人生プロセスの描き方の異なる例を抽出した（図1～10）。

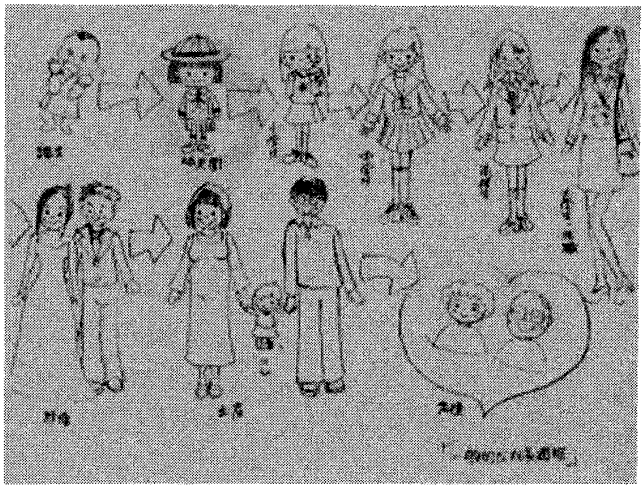

図1
描画中の言葉以外には説明なし。

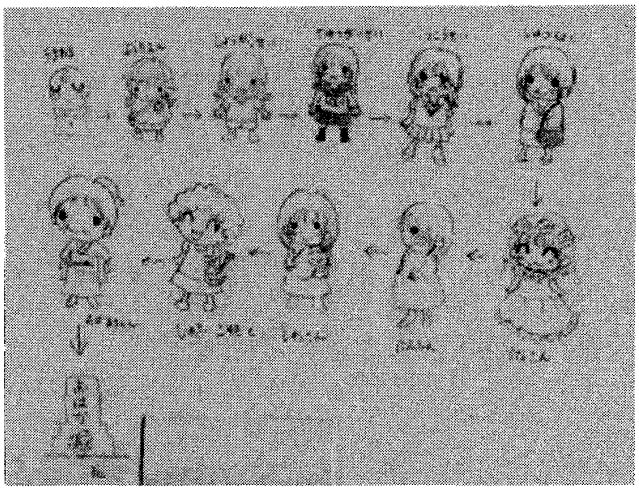

図2
描画中の言葉以外には説明なし。

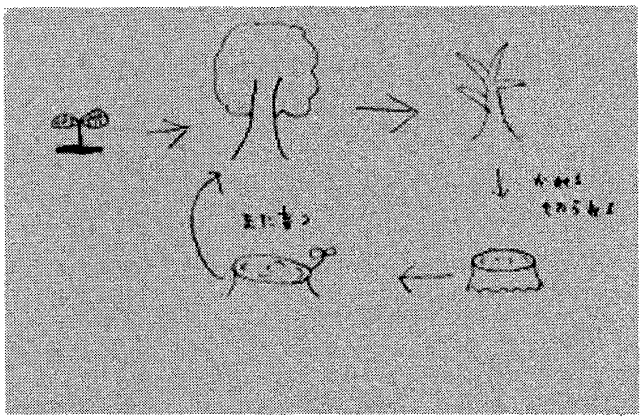

図3
描画中の言葉以外には説明なし。

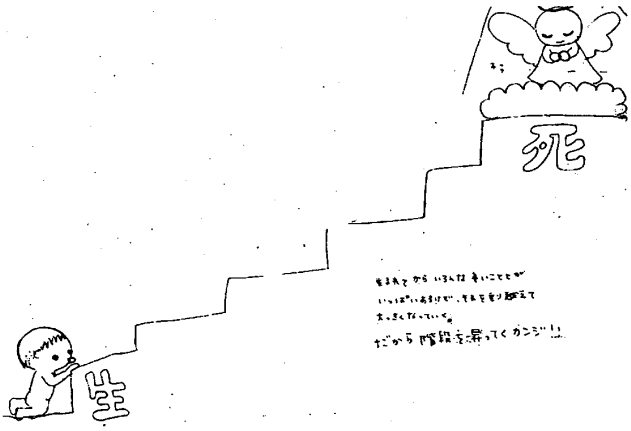

図4
生まれてから色んな辛いことがいっぱいあるけど，それを乗り越えて大っきくなっていく。だから階段を昇っていくカンジ。

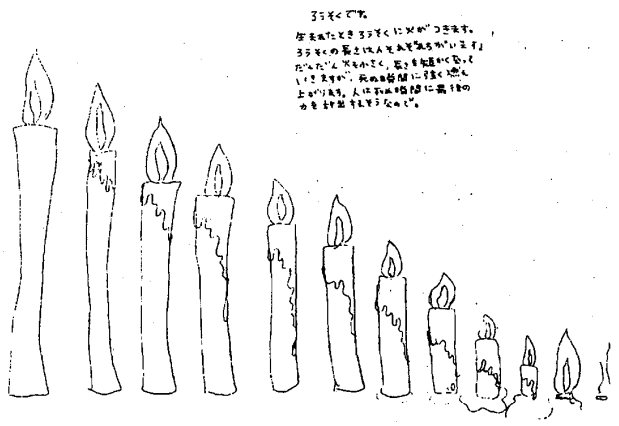

図5
ろうそくです。生まれたときろうそくに火がつきます。ろうそくの長さはひとそれぞれちがいます。だんだん火も小さく，長さも短くなっていきますが，死ぬ瞬間に強く燃え上がります。人は死ぬ瞬間に最後の力を放出するそうなので。

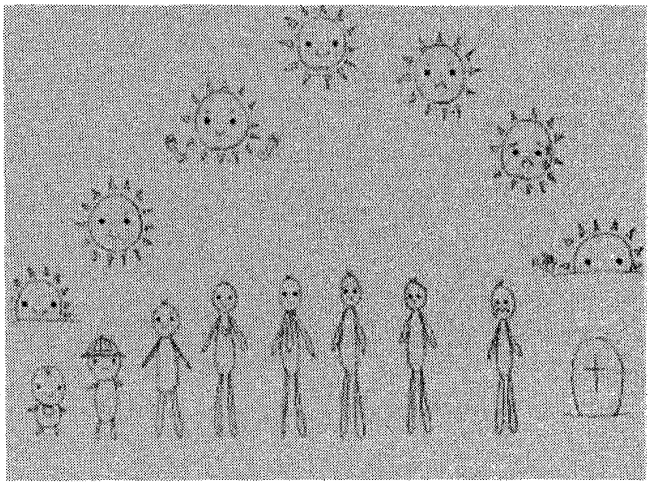

図6
人の生まれて（誕生）から死ぬまでを太陽で例えてみました。
誕生＝日の出　成長期（学生時代）＝昇っていく元気な太陽
30歳頃＝真夏に位置するテッカテカのしゃく熱太陽　まだまだ頑張るよ!!　死亡＝日の入り。お疲れ様でした。

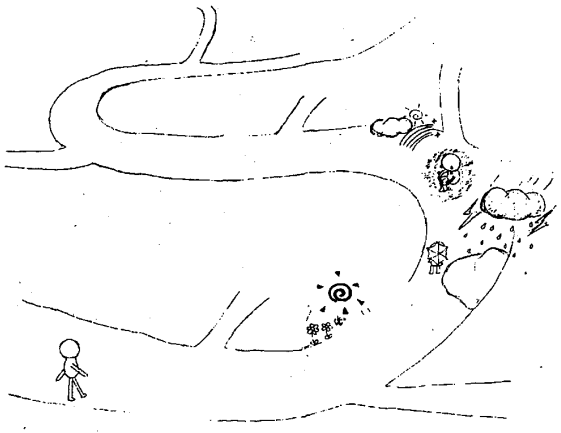

図7
説明なし。

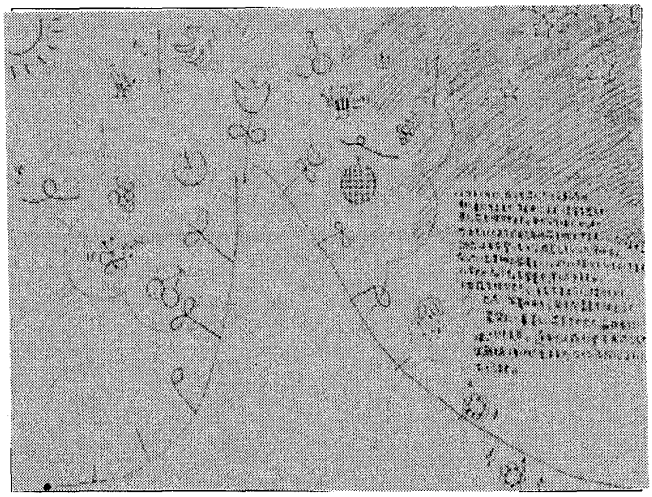

図8
人生を1日に，自分を花にたとえました。朝一番に生まれて，午前中にまず1回芽を出して，昼に花を咲かせます。昼から午後にかけてかれていくようで，また別の花を咲かせるようになります。この花は木を登りながら成長していく花で，その木になっている果物の栄養をいっぱい吸収していきます。ハチとちょうちょも栄養を運んできます。1回花を咲かせたら，木を下るように降りてきて，とった栄養の中から色々な毒素を排出して最後に一番美しい花を咲かせて夜の中に帰っていきます。途中では雨も風もあったりして困難もありやけど生まれたラインと同じところにもどります。

図9
花は若葉→つぼみ→花→種というサイクルを持っていて人間のサイクルに少し似ているなと感じました。だけど花は下の根っこに支えられて立っていられるものです。それは周りからいろんな栄養をもらい，また外にはきだすことで周りの役にも立っている。根（支え）は年をとっても変わらずあるものだし，私は人生の中で人の支えなしでは生きられない所もあると思うから増え続ける根の状態を書いてみました。

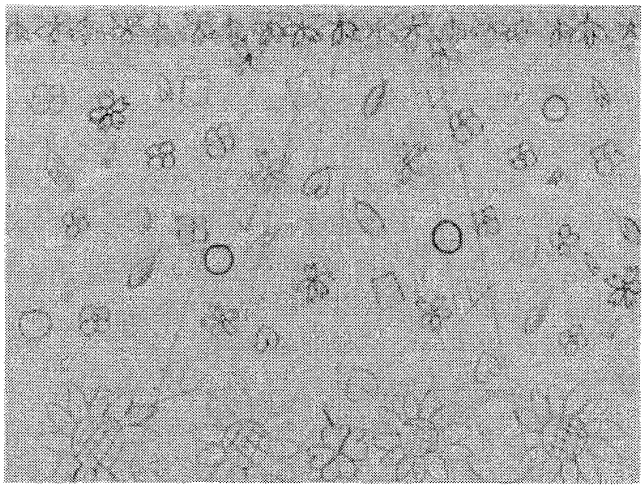

図10

生まれたのが秋なのでもみじを書きました。生まれたばかりの自分をイメージを桜としました。桜のピンクは私が大好きな色です。春に咲く桜をみると心が「ホッ」とする気持ちになります。人の楽しい，嬉しい気持ちだけでなく，悲しい，辛い気持ちを理解できる時に優しく，時にきびしい，優しい心のある人間になりたいと思います。線は虹をイメージしました。私の夢は「看護師」になることです。そして，いつか障害者の人たちと一緒に色々なことをしたいと思っています。その夢に向かってこれから頑張りたいです。太陽のように明るく心の広い人になりたいと思いヒマワリを書きました。人生の最後でもある「死」は自分の人生に誇りを持って死にたいです。

考　察

看護学生の死生観をとらえることを目的として，「人生のイメージ画」を実施した。ここでは，大学生との比較において，死に対する意識，人生のプロセスに対する意識，人間に対する意識の３側面の特徴を検討し，次に個別の描画から見た特徴について考察する。

(1)　大学生との比較から見た看護学生の特徴

死に対する意識について　描かれた「人生のイメージ画」を，死を描くかどうかという視点で分類し整理した。その結果，看護学生は看護専攻ではない大学生に比べて，相対的に多くの割合で描画の中に「死」を何らかの形で描くという仮説は支持されなかった。しかし，学校別に見ると，Ｘ高校看護科の学生における「死を描く」割合は，Ｙ看護専門学校に比べて高いことが分かった。これについて考えられる理由の１つには，看護教育を受けてきた経験の長さに差があることがある。Ｘ看護およびＹ看護の学生はいずれも，ほとんどが18歳から19歳である。しかし，Ｘ看護の学生は高校入学時より看護科の所属学生として既に３年間が経過し，４年目の学生であるのに対し，Ｙ看護の学生は高校卒業後，看護専門学校に入学して１年目であり，看護学を学び始めて４ヶ月程度である。したがって，看護師になるための専門教育を受ける中で，生と死について考える機会は，看護学生以外の同世代の青年よりも相対的に多いのではないだろうか。

ところが，Ｚ大（文系）の学生は相対的にＺ大（理系）の学生よりも「死を描く」割合が多いという結果も得られた。これは，専門領域の志向性の差が「死」についての考え方の違いとして表れたと考えられるかもしれないが，この考えに立つ場合，同じように看護を志向しているＸ看護とＹ看護との差を説明するのが難しくなる。看護師をめざす際の志向性や動機づけのあり方，さらに看護学の専門教育の過程での気持ちの変化などについても，検討していく必要があるだろう。

人生のプロセスに対する意識について　専攻や学校の違いにかかわらず８割以上の学生が人生をプロセスとして描いていた。全体として，人生の各時期における出来事を順に描いていく平坦型プロセスが多い。看護学生と大学生との間でプロセスの描き方に違いがあるかどうか見るため，平坦型と他のプロセスの割合を比較したところ，傾向差が見られた。看護学生は，世代間の連関を視野に入れた円環型や，山のように最高潮となる一時期をもつピーク型で人生をとらえるもの，その他複数の特徴を合わせもったプロセスを描くものが，大学生よりも出現しやすいことがわかった。各プロセスの描画例については後述する。

看護学生の場合，入学した時点で既に職業選択をしており，ある程度明確な人生設計を描くことができる。他方，一般大学生においては，学部や専攻領域にもよるが，１，２年生の段階で具体的な職業選択はまだなされていない。こうした職業選択・決定のあり方が，人生に対するイメージに影響を及ぼしている可能性もあるが，今回の調査では確かめることはできない。

人間に対する意識について　人間を描くかどうかという点では，看護学生と大学生とで有意な差は見られなかったが，描かれた人間が「自分」であるという割合は看護学生の方が相対的に高かった。看護学生の方が自分の人生を思い描く傾向が大きいのは，「人生のプロセスに対する意識について」でも述べたように，看護師という職業につくという明確な目標にもとづいて人生イメージを具体的に描きやすいことが考えられる。大学生の場合，自分自身よりも人間一般の人生として描く，他の生き物になぞらえて描く，幾何学図形で描く，といった表現に見られるような，より一般化された，あるいは抽象化したとらえ方をする傾向があるのではないかと考えられた。今後「人生のイメージ画」を用いて個人の死生観に接近するためには，何を描いたのか，なぜそのように描いたのか，ということについて，面接などで直接語ってもら

うことで深めていくことが欠かせない作業となってくるであろう。

(2) 個別の描画から見た看護学生の特徴

やまだ（2002a）は，人生のイメージ画を通じて表れてくるライフサイクルをもとに，死をも含んだ世代間にわたるライフサイクルモデルの構築を提案している。そこでは，生涯発達のプロセスとして，成長モデル，熟達モデル，成熟モデル，両行モデル，過程モデル，円環モデル，という6つのモデルが示されている。これを用いて，個々の看護学生の絵について人生プロセスの描き方という視点から検討したい。

今回の調査で描かれた絵で最も多かった平坦型プロセス（B6）は，やまだのモデル名に倣えば，図1や図2のような「過程モデル」に近いものであった。図1では「一般的な成長過程」という説明がなされている。社会的な身分や役割の変化を基準に，それに合わせて変化の様子を描いている。赤ちゃんから老後までが描かれ，死は描かれていない。図2ではコメントは無かったが，図1同様に社会的な身分や役割を区切りにしながら，発達段階の変化を描いている。最期の場面は具体的な老人の姿や死者は描かれず，死を象徴するお墓が描かれている。

図3の円環型プロセス（B2）は，やまだの「円環モデル」に相当する。図3では，木が枯れて切られても，その切り株を苗床として再び新たな木が生まれ育ち，これが繰り返されるというイメージである。新たに育つ木は全く新しい場所でその芽を出すのではなく，古い切り株と同じ場所で芽を出す様子が描かれている。大学生群ではほとんど見られず，看護学生，とくにX看護に特徴的であった。

やまだのいう「熟達モデル」に近い絵としては図5のような上昇型プロセス（B3）が挙げられる。図4では「困難を乗り越え階段を昇っていく感じ」を描いたということで，その階段の最上段には死を象徴する天使が描かれている。

図5は下降型するプロセス（B4）として唯一分類されたものである。生まれた時にろうそくに灯がともり年月を重ねるに従ってろうそくは短くなっていく。最期の瞬間では，ろうそく自体は小さくても大きな炎を灯すとされているコメントからは，やまだの「両行モデル」に近いのではないだろうか。

ピーク型プロセス（B5）を描いた図6は，「成熟モデル」として理解できる。人間の姿の変容だけではなくそれと並行して太陽の高さが描かれており，最も太陽が高いところは30歳頃に相当するとのコメントがある。

図7は分岐型プロセス（B7）である。人生は様々な選択肢の中から1つの道を選び取っていくものであり，その過程で困難に遭遇することもある様子が描かれている。「過程モデル」の一つのあり方と考えられる。

少数ではあるものの図8から図9のような絵も見られた。これらは，単一のモデルでは説明しづらく，複数のモデルが混在していると考えられる。図8の絵では「昼に花を咲かせ，かれていく様でまた別の花を咲かせる……花は木を下りつつも最後に1番美しい花を咲かせて闇の中へ帰っていく」という説明がなされている。これは成熟モデルと円環モデルが混在した絵になっているといえる。図9の絵では「人間のサイクルと花のサイクルが似ている。花は根に支えられて立っていられる」という説明がなされており，地上に見える花は枯れてしまうが，地下に伸びた根は周囲からの支えに相当し，最後に近づけば近づくほど増え続けて地中に伸びていく。また，次の世代を担う綿毛が旅立っていく様子も描かれていた。こういったことから，生まれてから死ぬまでを周囲と本人との相互作用の連続というように捉えていることが分かる。先行研究との比較でいえば，熟達モデルや両行モデル，円環モデルの混在したものと見なせるのではないだろうか。

また，プロセスを描かなかったもの（B1）として図10のような絵が見られた。図中の線は虹をイメージしたもので，自分の生まれた季節にあった植物（の葉）や自分の夢などをイメージとして表現している。

円環モデルや両行モデルに当たるイメージ画には，次世代とのつながりや，一面的ではない人生の意味について考える視点の萌芽があると考えられ，グループワークなどで活用する中で，こうした人生プロセスのとらえ方の違いに着目して話し合うことによって死生観を深めていくことができるのではないだろうか。

まとめと今後の課題

将来現場で終末期医療を施す際に必要とされている看護師の死生観に関して，看護師を目指す学生と他の同年代の学生とでどのような差異があるのかをとらえることを目的として調査を行った。方法として「人生のイメージ画」を用いることにより，知的・概念的レベルではない内的なイメージを把握することを意図した。看護学生は死に対する関心や意識が高く，イメージ画の中にもそれが描かれる傾向があると予想したが，仮説は支持されず，学校により異なるという結果が得られた。また，人生のプロセスに対して，人生を発達段階ごとの出来事の連鎖として描く「平坦型プロセス」が被験者全体に多かったが，その中でも看護学生は大学生に比べて「円環型」や「ピーク型」などが出現しやすいこと，また，人生を

描くという課題に対して，人間一般ではなく自分自身の人生を思い描きやすいことが示唆された。こうした特徴を，次世代とのつながりや人生の意味などについて考える際の手がかりとしていくことができるだろう。

しかし，今回は「人生のイメージ画」のみを集団実施するというやり方であったため，絵の内容について十分な説明は得られず，看護師となることへの動機づけや過去の体験や知識などとの関連を見ることはできなかった。今後の課題としては以下の２点があげられる。

・面接調査を行い，絵の内容や看護師となる自分について語ってもらうこと。
・多くの実習を経験した，高学年の看護学生において，どのように変化していくのかを比較検討すること。

【付録１「人生のイメージ描画」の分類基準】

分類基準Ａ：死が描かれているか。

ここで「死が描かれる」とは，死んだ人間の姿，死を象徴する物や出来事，他の生き物や事物の衰退にたとえた表現を含む。以下の５つのいずれかに分類する。

Ａ１　死が描かれない。

Ａ２　人間または動物の死を描く（周囲に誰も人がおらず，一人の状態）。

Ａ３　人間または動物の死を描くが，周囲に家族や親しい人がいる（何人でもよい）。

Ａ４　死をが描くが，「死」という文字や，天使・十字架・お墓・闇，黒枠の写真や葬式など，象徴的に表現される。植物が枯れていたりろうそくが消えていたりする場合なども，ここに含めた。

Ａ５　分類困難。

注：人間または動物の姿（Ａ２かＡ３）と象徴的表現（Ａ４）が同時に描かれているときは，人間または動物が描かれていることを優先して分類し，ブレンドは避ける。

分類基準Ｂ：人生がプロセス（時間的経過）としてを描かれているか。

「プロセス」とは絵の中に時間的変化が描かれているものを指す。矢印で経過を示したり，赤ちゃんから老人へと変化していく様子がわかるように描かれていたりする場合である。以下の８つのいずれかに分類する。

Ｂ１　プロセスが描かれない。人生の１場面を写真に撮ったように描いたものや，一つの事象で人生を表現したもの。

Ｂ２　円環的プロセスを描く。円環的とは死で人生が終わらずに，命がつながっていくことを意味している。別の命として生まれ変わる，次の世代として命がつながっていくことを，始点と終点を重ねたり矢印でつなげることで表現しているもの。「生まれ変わる」という言葉で書いてあっても，矢印などで始点の絵へのつながりがなければ円環的としない。次の世代（子ども）が本人の人生のプロセスの一部として描かれていても円環的としない。

Ｂ３　上昇するプロセスを描く。階段をステップアップするように上昇していく，増加していく，大きくなっていく，など。

Ｂ４　下降するプロセスを描く。階段を下りるように下方向に向かっていくもの，衰えていく過程を描くもの。

Ｂ５　山のようにピーク（頂点・アクセント）を描く。花が咲き誇るなど，盛りの時期をもつ場合も含める。単に，手前に位置していたり大きく描いているだけではピークとは見なさない。絵についてのコメントも参考にして判断する。

Ｂ６　プロセスを描くが，各時期の出来事や特徴を淡々と描く。アクセントが無く，平坦なプロセス。

Ｂ７　迷路のように分岐点のあるプロセスを描く。選択肢をつくり複数のライフコースを表現。

Ｂ８　分類困難なもの。たとえば，花は枯れるが根はしっかりと深く張る，といったような重複もここに分類する。

分類基準Ｃ：何によって人生を表現しているか。

以下の８つのいずれかに分類する。

Ｃ１　人間をが描きかれ，本人が登場する。自分自身本人そのものの変化を人生を描いたものだと捉えている場合はこの分類にする。

Ｃ２　人間を描き，人間一般の人生として描いたもの。

Ｃ３　人間を描くが，本人か人間一般か判断が困難な場合。

Ｃ４　植物や動物など（生と死がある）他の生き物の一生に喩えて描く。

Ｃ５　人生を自然の風景（山，海，川，谷）や天気の変化などに見立てて描く。

Ｃ６　人工物により人生を象徴的に描く。たとえば，花火（はかなさ）やダルマ（教訓めいたもの）などに見立てて描かれた例がある。

Ｃ７　直線や幾何学的な図形，曲がりくねった道，迷路を描く。

Ｃ８　その他，分類困難なもの

注１：Ｃ１かＣ２かの判断には，付加情報としてコメントの記述も参考にした。

注２：人間や生き物が登場していても，それが中心テーマではないと見なされる場合は，Ｃ４～Ｃ７に分類した。

引用文献

アルフォンス・デーケン　1987　がん患者に接するナースの“こころ”　月刊ナーシング，7(9)，38-39.

茶園美香・岩瀬恵美　2003　終末期の看護実習における「死生観」の変化－実習レポートの内内容分析－　慶應義塾看護短期大学紀要，**13**，63-71.

Cohen 1960 A coefficient of agreement for nominal scales. Educational and Psychological Measurement, **20**, 37-46

Colletto, L. J., & Lester, P. 1969 The fear of death and the fear of dying. *Journal of Psychology*, **72**, 179-181.

Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T., 1987 Death attitudes across the life-span: The development and validation of the death attitude profile (DAP). *Omega: Journal of Death and Dying*, **18**, 113-128

平井啓　1999　死生観に関する研究（Ｉ）－死生観尺度の開発－　死の臨床，**34**，**22**(2)，245.

平山正実　1991　死生学とはなにか　日本評論社

Hoelter, J. W. 1979 Multidimensional treatment of fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 996-999

金児曉嗣　1994　大学生とその両親の死の不安と死観　人文研究　大阪市立大学文学部紀要，**46**，1-28.

加藤義信・やまだようこ　2002　日仏青年が抱いている素朴「他界」観と「たましい」観　愛知県立大学大学院国際文化研究科論集，**3**，47-72.

河合千恵子・下仲順子・中里克治　1996　老年期における死に対する態度　老年社会科学，**17**，107-116.

河津（水野）芳子　1982　連想詩画にあらわれた看護学生の看護婦像　看護展望，**7**(11)，82-91.

河津芳子　2004　教育実践報告ヒューマニスティックアプローチを用いた授業での学びの様相－連想詩画法による授業感想文の内容分析を通して　Quality-Nursing　**10**(3)　251-256.

菊池和子　2000　看護学生の死生観－Purpose-in-Life Testの分析より－　岩手県立大学看護学部紀要，**2**，91-98.

Leininger, M. M. 1992 ／稲岡文昭監訳（1995）　レイニンガー看護論－文化ケアの多様性と普遍性　医学書院　25.

森敏昭・吉田寿夫　2003　心理学のためのデータ解析テクニカルブック　北大路書房

新見明子　2002　看護学生の死生観　－Purpose in Life Test分析より－　川崎医療短期大学紀要，**22**，25-30.

大山由紀子・沖野良枝　2003　看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究　第34回日本看護学会論文集　看護総合，**34**，75-77.

竹下美恵子・魚住郁子・渡辺弥生・伊藤豊美・近藤里美・寺田美恵子・濱口高子・今井範子　2001　看護学生の死生観に関する研究第３報－領域別臨地実習前後の比較－　第32回日本看護学会論文集　看護総合，**32**，76-78.

丹下智香子　1995　死生観の展開　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**42**，149-156.

谷荘吉　1991　医学看護教育における死の教育　樋口和彦・平山正実（編）　生と死の教育－デスエデュケーションのすすめ　創元社　171-196.

Templer, D. I. 1970 The construction and validation of a death anxiety scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.

やまだようこ　1988　私をつつむ母なるもの　イメージ画にみる日本文化の心理　有斐閣）

やまだようこ　1995　生涯発達のモデル　無藤隆・やまだようこ（編）　生涯発達心理学とは何か　講座生涯発達心理学第１巻　金子書房

やまだようこ　2000　日本文化の生命循環と生涯発達観　小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次（編）　人間発達と心理学　金子書房　106-115.

Yamada, Y., & Kato, Y. 2001 Images of the soul and the circulation cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. 京都大学教育学研究科紀要，**47**，1-27.

やまだようこ　2002a　生涯発達心理学の課題と未来　小嶋秀夫・やまだようこ（編）　生涯発達心理学　放送大学教材　203-224.

やまだようこ　2002b　現場心理学における質的データからのモデル構築プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に　質的心理学研究，1，新曜社，107-128.

Yamada, Y. 2002 Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death". 京都大学大学院教育学研究

科紀要, **48**, 39-62.
山本俊一　1992　死生学のすすめ　医学書院
key words: 看護師　死生観　終末期医療　描画　イメージ

(2005年9月30日　受稿)

ABSTRACT

Life and death images of nursing students: Exploring their life and death perspectives through picture-drawing

Miyako MORITA and Tomohisa OHNISHI

In this report, we studied the nurses' view of life and death in the context of terminal care. First, our research aimed at what kind of difference there is about the view of life and death between nursing students and ordinary college students. Second, we sought to compare their perceptions of life and death based on conventional life span developmental psychology. We utilized picture drawings as a means of grasping their image of life and death, rather than questionnaire reports. We hypothesized that there would be a tendency for the nursing student to have higher content of life and death images in their drawings, relative to other students, since they would have more opportunities to discuss these issues within their course work. However, this hypothesis was not statistically supported. The reason for this may be that there were differences in the contents of the courses which nurses have taken.

Key words : nurse, terminal care, picture-drawing, image, life and death perspective